

森林教室のしゃべり方について

岡崎営林署 庶務課 東 章

1. はじめに

わが国の森林林業をとりまく情勢は、きわめてきびしいものがある。

このような状況にてらして、林野庁をはじめ各署では、様々な手法を駆使して、森林林業の啓蒙活動に奔走しているが、森林教室もそのひとつとして、大きな役割を果たしているとおもう。

岡崎署でも、昭和55年から、本格的に森林教室を実施してきたが、この間に行った森林教室は、数百校に及び、受講者も5,000人を超えるに至った。

ひとくちに森林教室といっても、その態様は様々で、それぞれに長所短所をもっている。

例えば、野外教育はレクリエーション的な内容を含んでいるし、生きた教材に恵まれ、楽しみながら学習できるという長所をもっている。しかし、内容の濃い学習に欠けるし、また、季節の制約をうけるという短所もある。

一方、室内教育では、季節をえらばずに、濃密な学習ができる長所はあるが、反面、講師のしゃべり方の巧拙が問われるという短所をもっている。つまり、野外は視学教育、室内は聴覚教育であり、それぞれに特徴的な利点や、欠点をもっているということである。

岡崎署では、森林学校の今日的な危機に対応して、成人対象の室内教育を原則としてきたため、否応なしに、しゃべり方に関心をもたざるを得ない実情にあった。とりわけ、森林というテーマが、新人類といわれる世代に、きわめて関心のうすい部門だけに、しゃべり方には細心の気くばりが要求されてきたのである。

今日、森林教室の必要性を否定する人はないであろう。しかし、組織的な指導も、予算のうらづけもない実態のなかで、各署の担当者は、独学と創意工夫によって、ここまで歩き続けてきたとおもう。

こうした環境条件のせいも、残念なことに森林教室の講師は、一種の専門職になったような感じをうけるのである。

いま、職場で森林教室の講師を依頼したなら、多くの人はこれを辞退するであろう。

なぜだろうか、人前でしゃべることが苦手だという理由もあるが、それにもまして、なにをどのようにしゃべったらよいのか、皆目自信が持てないからではなからうか。

そこで、今回は、私のささやかな経験から考察した、しゃべり方についてまとめてみた。

このレポートは、成人学級をベースにしたもので、低学年学級にはなじまない点があるかも知れないが、みなさんの批判や、指導がいただけるなら幸いである。

2. なにをしゃべったらよいか

森林教室でしゃべる基本型は、森林の効用であることは申すまでもない。しかし、その中から、受講者の年齢、人数、場所などを考慮して、しゃべることを選択し、整理しておくことが必要である。つまり、小学生か短大生か、野外か室内かなどを頭に入れて、脚本を作ることである。また、都会の学童か、山村の学童かによっても、スポットのあて方を変えることが必要である。

私は、都会の学童には水を中心にした、森林の公益的機能を、山村の学童には山仕事の内容や、その苦勞話しにウエイトをかけてきた。また、短大生には、材価の問題を分析して、森林林業の衰退と、その関連を説いてきた。私の行っている短大では、専攻の関係もあろうが、植生の遷移や、フィットンチッドの効用などに関心が高いようである。

講師の知識レベルとしては、高度な専門的知識は必要なく、林業技術協会が発行した「森と木の質問箱」を修得しておけば、小中学校なら十分通用すると思う。ただし、講義を楽しくするために、社会、文化、時事問題などを適宜挿入するので、そうした知識を常にため込んでおくことが大切である。

3. どうしゃべったらよいか

教育関係者の話しによると、多数の人を前にしゃべるときは、最初の三分間、つまり誘導段階が勝負だという。

これは、緊張した雰囲気をやわらげ、講師の話しに、期待と興味をもたせるため、この誘導段階の出来不出来が、森林教室の成否にかかわるというのである

私は、このアドバイスに従って、誘導段階では、色々なことを試みてみた。

例えば、神秘哲学といわれる、ノストラダムスの大予言を用いたり、アメリカ政府が発表した「西暦2000年の地球」を引用することなどであるが、原生林を素題にした、網走番外地の話しは、私が網走出身のせいか説得力があるようで、誘導段階には気安く用いることにしている。

どんな場合でも、たて続けに延々としゃべられると、聞いている方が疲れてしまう。私は、しゃべり言葉も文章と同じで、マルや、テンに心がけてやることが大切だと思う。

マルとマルの間をあまり長くすると、聞き手も、しゃべり手も本論を見失ってしまう。

1センテンスを短かくして、一拍休止符をうつような気持でしゃべることが、話をわかりやすくするコツだと思っている。

4. 話題を適宜に転換すること

私の観察によると、受講者の集中力は、年齢に多少の差があるが、10分～15分が限界のよう思う。ただし、これは面白くも、おかしくもない森林の話しの場合で、同好者の話しなどと

は、比較ができないであろう。

したがって、私は受講者の表情や姿勢を観察しながら、気分を転換をさせるために、話題を適宜に変えることにしている。

例えば、日航機の墜落事故現場を、原生林と報道したマスコミの誤報や、営林署員からみた知床問題、等々であるが、短大においては、しばしば猥談を用いてもいる。これらの話題は、極力森林にかかわりのあるものを、選ぶように心掛けているが、タイミングのとり方や、話題の選定には毎回苦勞している。

私の持時間は、短大では90分、成人大学では120分であるから、話題の転換なしに森林教室の成功は考えられない。

5. 結論を明らかに

短大や成人大学で、「森林の重要なことは解ったが、私たちはいま何をすればよいのか」という質問を再々うけた。

たしかに、木を植え、それを守り育てることは大切であろう。そして、森林の重要性を認識してもらうことも必要だとも思う。しかし、森林教室の本当の目的は、世論を喚起するための啓蒙活動である、と位置づけてよいのではないか。

森林の重要性を説いていけば、必然的に世論の喚起にゆきつくという考え方は、森林の今日的な危機に即応しない、きわめて消極的な発想だと考える。

いま必要なことは、森林行政を動かすための、強力な世論の醸成だとも思う。小中学生は論外としても、成人学級における森林教室では、世論喚起が目的であることを明らかにし、具体的に協力を要請することが正論だと考える。

6. む す び

森林林業の危機を、早急に解消する特効薬がない以上、啓蒙活動の一環として、森林教室の出番は益々ふえることが予想される。

このような状況をふまえて、講師の育成、予算の増額、普通科研修生の話し方指導など、当局としても、本腰を入れて取り組むことが必要であろう。

ところで、森林教室において、満足にしゃべることなど、一朝一夕にできるものではない。私自身、一度も納得できる講義はなかったし、いまだに、思考錯誤の連続なのである。

要は、経験を重ねることではないか、経験のなかからこそ、ベターな森林教室のあり方が生れるとおもう。

私の、独断と偏見による考察ではあるが、これからも実践の場で、ひとつひとつ、私なりに検

証していきたいとおもっている。